

別記様式第2号（第12条関係）

文書質問答弁書

回答日：平成24年2月3日

担当部局：都市整備部

四日市市議会基本条例第16条第1項の規定に基づく小川政人議員の文書質問について同条第3項の規定に基づき、下記のとおり答弁いたします。

十四川の河川計画及び調整池の計画と水害訴訟における裁判所の判断についてこれまでの議会や文書質問に対する答弁への疑問点について

『【答弁1】

河川計画では対象降雨を定めて流量を計算し、その流量を流すことが出来る河川断面を定めています。十四川の河川計画での10年確率の降雨を対象とした計算では、ネック点を通過した水は豊栄樋門が開いていれば流下できると考えます。なお、東海豪雨時については、これをはるかに上回る降雨があったものであり、その検証については既に裁判所での判断がなされているものと考えます。』について

【質問】質問方法を変えて再質問致します。

十四川の河川計画での10年確率の降雨ではネック点で溢水する計算となり、東海豪雨時にはネック点で溢水しなかったのだから、十四川の河川計画での10年確率の降雨でネック点を通過する水量より同量か、より少量の水が樋門まで流れたのと違いますか、その水は豊栄樋門が開いていれば流下できる（溢水しない）のではないですか、お尋ねいたします。

【答弁1-1】

東海豪雨時にどれだけの水が樋門まで流れたかは定かではありませんが、河川計画での計算ではネック点を通過した水は豊栄樋門が開いていれば流下できると考えます。

東海豪雨時にはネック点で溢水しなかったのに、なぜ十四川の流域で河川計画での10年確率の降雨をはるかに上回る降雨があったと考えるのですか、お尋ねいたします。

【答弁1-2】

裁判に提出された乙 17 号証で、河川計画を上回る降雨を与えてシミュレーションされていますが、裁判でも「北消防署降雨データを大矢知地区の降雨量とすることが不合理とはいえず」とし、「本件豪雨は、通常予想外の猛烈なもので、それにより生じた洪水は、想定外の自然現象によるものであったといわざるを得ない。」と判断されています。

十四川のネック点で溢水しなかったのは、十四川の流域では河川計画での10年確率の降雨よりも降雨量が少なかったと判断いたしますが、ご所見をお答えください。

【答弁1-3】

東海豪雨時にはネック点で溢水したのか、しなかったのか、確認を行っておらず、お答えできません。

『 答弁1

都市整備部としましては、十四川調整池の計画として流下能力の検証を行っておりますが、東海豪雨時にどれだけ流れたかについては確認しておらず、また検証もしていませんので比較することはできません。東海豪雨時の想定については裁判時に提出されたシミュレーションがあり、この検証については、すでに裁判所での判断がなされたものと考えます。』について

【質問】

東海豪雨時に十四川のどこが溢水し、どこが溢水しなかったのか検証してないのですか、お尋ねいたします。河川管理の部門で河川の一部が溢水したにも拘らず、検証しなかったのですか、それで市民の安全安心を守ることができるのですか、お尋ねいたします。

【答弁2】

東海豪雨時の溢水状況については報告を受けているものの、詳細な確認は行っていません。しかし、十四川については東海豪雨で十四川周辺に浸水被害が発生した事実を受けて、市民の安全安心を守るために、調整池の建設や嵩上げを行っています。

【質問】

私は、当時の松本河川課長から「十四川が近鉄線より上流の未改修のところ(ネック点を含む)で溢水していないことを何度も堤防を歩いて確認した」と聞いております。下田前河川排水課長も「川が溢水すれば痕跡が残ると」教えてくれました。このことは東海豪雨時には十四川の河川計画での10年確率の降雨でネック点を通過する水量より同量か、より少量の水が樋門まで流れたと検証したことになるのと違いますか、お尋ねいたします。

なんなら松本元課長に確認してください。

【答弁3】

東海豪雨時にはネック点で溢水したのか、しなかったのか、確認を行っておりませんのでお答えできません。

『《答弁2-1》

水理計算上でのネック点の考え方としては、地点が変わらなければ最大流量は変わらないと考えますが、東海豪雨時には検証しておりませんのでお答えできません。』について

【質問】

東海豪雨時に十四川が近鉄線より上流の未改修のところ(ネック点を含む)で溢水していないことは検証されているのと違いますか、お尋ねいたします。

塚田元都市整備部長も平成十五年の十二月定例会の私の一般質問に対して、「四高(四日市高校)付近で漏れなかった」と答弁している。

受付番号 平成23年第9号質問書に対する答弁書でも認めている。

【答弁4】

塚田元都市整備部長は、平成十五年の十二月定例会の一般質問に対して、「四高(四日市高校)付近で漏れなかった」と答弁している訳ではなく、小川議員が「なぜ四日市高校のあたりで水が漏れなかったか」ということをお聞きになりましたので、それに対して「多分、私の推測でございますが、富田で降った雨の量と十四川の上流部である大矢知で降った雨の量が違うんじゃないかなと。大矢知の方では富田ほど雨が降っていなかった、そういうふうに私はちょっと今推測しておるところでございます。」と答弁しているものであり、検証はされておられません。

『【答弁2】

アオイテックの流量調査における不等流計算に基づく河川の流下能力計算では、ネック点での最大流量 $16.143\text{m}^3/\text{秒}$ に対し、JRから下流側の十四川は $25\text{m}^3/\text{秒}$ の流下能力があるとされており、樋門が開いていれば流下できると考えますが、これは10年確率の降雨を想定した検討であり、東海豪雨を想定したものではありません。

東海豪雨時については、樋門が同日開扉されていたとしても十四川の溢水を回避することは出来ない、との裁判所の判断がなされているものと考えています。』と答えたことについて、

【質問】

「10年確率の降雨を想定したアオイテックの流量調査における不等流計算に基づく河川の流下能力計算では、ネック点での最大流量 $16.143\text{m}^3/\text{秒}$ に対し、JRから下流側の十四川は $25\text{m}^3/\text{秒}$ の流下能力があるとされており、樋門が開いていれば流下できると考えます」と答えたが、東海豪雨時はネック点で溢水しなかったことから、当日の十四川流域の降雨は10年確率を想定した降雨以下であり、当日のネック点での最大流量 $16.143\text{m}^3/\text{秒}$ 以下でもあるから、JRから下流側の十四川は計画高水流量は $19\text{m}^3/\text{秒}$ の流下能力があるとされており、樋門が開いていれば流下できた（溢水しなかった）のと違いますか、お尋ねいたします。

【答弁5】

東海豪雨時の十四川の水量についてのお尋ねですが、東海豪雨時に十四川に実際にどれだけの水が流れていたのかについては確認していないため、お答えできません。

『《答弁2-2》

東海豪雨時の検証につきましては、裁判所に提出されたシミュレーションをもとに、すでに裁判所の判断がなされているものと考えます。』について、

【質問】

裁判所に提出されたシミュレーション乙17号証の縦断面図は北消防署で記録された降雨（最大時間当たり 120.5mm の降雨記録）を十四川流域に降らせその水量をネック点で溢水させずに樋門まで流し午後5時ごろ溢水する可能性があるとしたためなシミュレーションをもとに、裁判所の判断がなされているのではないですか、お尋ねいたします。

【答弁6-1】

乙17号証は、大矢知で120mmの雨を降らせましたが、これは大矢知に観測所がなく、どれだけの雨が降ったのか特定できないため、一番近くの北消防署のデータを使ったものです。それに関して、裁判所は、「北消防署のデータを使ったのは不合理とは言えない。」と判断しており、これは正しいものと理解しております。

川島係長は日本上下水道設計（株）の職員から「ネック点で水を溢さずに樋門まで流している」と聞いたのではないですか、お尋ねいたします。

【答弁6-2】

乙17号証で用いられているシミュレーションは、国土交通省から推薦されていたソフトのひとつで、異なる洪水現象を同時に処理できる「雨水対策における流出解析モデル」を採用しており、水路や管路で溢れた水も水位が下がれば地表面から再び流れ込むという考え方のソフトであり、区域内全体を見渡す手法であって、当時としては合理的手法であると説明されたと思います。

稲垣河川排水課長は田中上下水道局技術部長が政友クラブの会派説明会で「ネック点で溢れた水をもう一度、川に戻して樋門まで流している」と話したのを聴いていたのではないですか、そのことを私が稲垣河川排水課長に確認したところ認めたのではないですか、お尋ねいたします。

【答弁6-3】

シミュレーションは、水路や管路で溢れた水も水位が下がれば地表面から再び流れ込むという考え方のソフトを用いているとの説明をされたと思います。

塚田元都市整備部長も平成十五年の十二月定例会の私の一般質問に対して、「四高（四日市高校）付近で漏れなかったのは、多分、私の推測でございますが富田で降った雨の量と十四川の上流部である大矢知で降った雨の量が違うんじゃないかなと。大矢知の方では富田（北消防署）ほど雨が降っていなかった」と答弁している。富田（北消防署）で記録された降雨（最大時間当たり120.5mmの降雨記録）を基に大矢知でも同じ降雨として作成した十四川の縦断面図は間違いではないですか、お尋ねいたします。

【答弁6-4】

質問にある縦断面図とは乙17号証に示された図と思われませんが、乙17号証は裁判にお

いて信頼に値すると判断されたものと理解します。

『《答弁2-3》

平成22年度の十四川河川整備計画検討業務報告書では、余裕高がどのようになるかを計算しており、その数値をもとに現実に起こるであろう事象としてご質問をいただいておりますが、東海豪雨時については検証を行なっておらず、比較してお答えはできません。』について

【質問】

この報告ではネック点で東海豪雨時の堤防の高さの約1cm下を静水が流れ、「樋門では当日の最高潮位（Y P 2.4m）でも溢れずに流れていく」と報告されている。堤防の1cm下を静水が流れるという計算は、現実なら、洪水は波打つから溢れる可能性があり、それ以下の水しか下流には流れていかなかったことになり、東海豪雨当日もネック点で溢れなかったのも、それ以上の水は下流に流れていかないので、溢れないことになり、偶然にも結果的に東海豪雨当日の数値と同じことになり、ネック点から下流は東海豪雨時の検証をしたのと同じことになり、裁判所の判断と違い当日樋門を開けておけばJR関西線より上流で溢水しなかったと結論付けているのではないですか、お尋ねします。

【答弁7-1】

平成22年度の十四川河川整備計画検討業務報告書では「東海豪雨程度の潮位波形であっても、計画ハイドログラフが発生しても氾濫しないようなポンプ規模が確保されている」あるいは「十四川における樋門及びポンプの運転操作が（現在の）計画通り実施されれば、河川計画規模の洪水流下に支障は無いと考えられる」と記述されており、東海豪雨時の降雨量に対しての記述はなく、検証もしてありません。

平成22年度の十四川河川整備計画検討業務報告書は百万円もかけて作成された報告書であり、しっかりと検証して、役所に都合が悪くても、市民や議会に説明するべきと思いますが、そのつもりはないのですかお尋ねいたします。

【答弁7-2】

報告書についてはすでに議会に説明済みです。

確かに東海豪雨について検証していないのですが、結果的にはネック点を通過す

る水量がほぼ同じになり、東海豪雨時の検証をしたのと同じ結果になる。小賢しい屁理屈をこねずに、技術者として正直に説明するべきと思いますが、いかがお考えですかお尋ねいたします。

【答弁7-3】

東海豪雨時については検証しておりませんのでお答えできません。

『《答弁2-4》

時間当たり120.5mmの降雨は、東海豪雨時のシミュレーションを行なうにあたり、北消防署のデータを仮定として用いたものであり、実際に十四川流域に同じ雨が降ったかについては定かではありません。十四川調整池及び堤防の嵩上げの必要性については、河川計画として時間当たり72.8mmの降雨を仮定して計算した結果として、流域の上流に調整池を造り、下流への流出量を抑えるとともに、河川の安全度を高めるために堤防の嵩上げをしたものであり、十四川的能力を補う手法として必要であると判断しています。』について

【質問】

十四川調整池の計画は、流域に10年確立の時間当たり72.8mmの降雨を仮定して計算した結果、近鉄線より上流の未改修のところ(ネック点を含む)へ21m³/秒の水が流入してくる。その結果ネック点で溢水することになり、このことから、東海豪雨時はネック点で溢水していないことから十四川流域では10年確立の時間当たり72.8mm以下の降雨であったことが実証され、当然十四川流域に時間当たり120.5mmの北消防署の降雨データもちいた乙17号証の縦断面シミュレーションは誤りであり、時間当たり120.5mmの雨水が未改修のところ(ネック点を含む)で、漏れずに改修済のところまで流れたとすると30m³/秒以上の水が流れたことになり、当日実際流れた水量の倍近くの水が流れた計算になる。それでも乙17号証の十四川の縦断面シミュレーションでは、午後5時ごろJRから国道1号線の間で溢れた可能性があるとは結論づけているのは誤りである。縦断面シミュレーションを信用できるとした裁判所の判断は誤りである。裁判所の判断を正しいとするなら河川計画に誤りがある事になると思われませんがいかがお考えですかお尋ねいたします。

【答弁8】

十四川調整池の計算手法は10年確率の雨量データ(1時間当り72.8mm)をもとに、その能力に応じた流量を流したときに河川の中の水位がどうなるかを表してい

ます。水位が堤防高以下での計算を行っており、溢れる状況での計算はできません。

一方、浸水シミュレーションでは十四川だけの計算をしているものではなく、周辺の下水道も含めて面的に計算し浸水状況を示しています。北消防署降雨データ(1時間当たり120.5mm)をもとに、溢れた水がどうなるかを(地表面氾濫解析で)計算しています。

これらは別の考え方によるものであって、双方ともなんら間違っているものではなく、これを比較しどちらかを間違いとする事はできません。

『《答弁2-5,6,7》

市職員の役割、責務についてご質問いただいておりますが、繰り返しの答弁になりますが、説明責任は市職員の責務と考えております。今後も誠実に対応させていただきたいと考えております。』について

【質問】

市の職員としての市民に対する責務が何なのか本当に理解しているのか疑問である。宮仕えが大変なのは理解するが、公務員はクビにはならないのだから、保身に走らずに市民の為に事の善悪はしっかりと述べるべきであると考えますが、いかがですか、お尋ねいたします。

平成十五年の十二月定例会での塚田都市整備部長(現上下水道事業管理者)の答弁は東海豪雨後の下水道部(水道局と合併して上下水道局となる)や井上四日市市長の従来の説明とは、正反対の答弁であり、私と市長が訴訟をしているにも拘らず、市長に不都合な答弁であった。これは都市整備部の篠原次長を始めとする、河川水理工学に詳しい人たちの正しい説明をしたいと考えた(調整池の事業計画を守るためでもあったろうが)正義感溢れる大変勇気ある答弁であった。本来、塚田都市整備部長(現上下水道事業管理者)は専門的知識のある部下の考えを市長及び市民に分かりやすく説明して真実を明らかにする義務があった。其のことを怠り、今の地位(上下水道事業管理者)と金(約1000万円の年収4年間と退職金約五百万円)に目がくらみ、悪魔に魂を売り渡し、自分たちの事業計画や過去の河川計画及び、市民の信頼や部下の信頼を裏切ったと考えますが、私の考えは間違いですかお尋ねいたします。その贖罪や口止めの意味も込めて、技術系の職員を部長にたくさん登用されたのと違うんでしょうか。市民に対しては何もしなくて良いんでしょうか、どう

思われますか、お尋ねいたします。

後藤前都市整備部長は「当日樋門を開けていれば溢れない」と何度も本会議や予算特別委員会及び、決算常任委員会で答弁している。一度も樋門を開けていても溢れたとは言わなかったし、河川計画は正しいと言い続けた河川計画と裁判所の判断とは両立しないのではないですか、お尋ねいたします。

貴方は先輩の勇気ある答弁を見習わずに裏切りに加担するのですか、お尋ねいたします。

とても誠実に答弁しているとは思えません。市の職員としてふさわしくないと思いますが、いかがですか。自分の知識に誠実に答えることができない職場なら、家族と相談して退職して自分の知識に誠実になれる職を探したらどうですか、正直な人間らしい生活を送ることができると思いますが、いかがお考えですか、お尋ねいたします。

退職しないなら、後輩のためにも組織の在り方を改善して、後輩の人たちが人間らしい生活が送れる嘘をつかなくても良い職場にするべきだと思いますがいかがお考えですか、お尋ねいたします。

稲垣河川排水課長は議員に対しても媚びずに、ことのよし悪しをはっきりという見どころのある人だと評価していた。政友クラブ内でも評判が良いのに、なぜ一般質問のヒヤリングで認めたことを上司に報告しないのか、お尋ねいたします。

稲垣河川排水課長は「小川議員は裁判所の判断より、河川計画のが正しいと言うてくれますやないですか」と喜ぶより、裁判所の判断より、市の河川計画が正しいことを上司や市民にしっかりと説明することが稲垣さんらしいですよ。間違いを正さずに、放置しておく決断をしているのは上下水道事業管理者ですか、二役ですか、お尋ねいたします。

【答弁 9 - 1、2、3、4、5、6、7、8】

いずれの問いも市職員の責務に関するご質問ですが、繰り返しの答弁になりますが、今後も誠実に対応させていただきたいと考えています。

塚田上下水道事業管理者

実際は当事樋門が開いてなかったのですが、樋門が開いていればどうなったかという事実関係について分かりません。したがって、裁判の過程の中で樋門が開いていた場合、どのような状況になるんだと、そういったシミュレーションをしております。それで、そのシミュレーションが議員もよく言われる乙16号、17号証でございます。そのシミュレーションの中では樋門が開いていても、午後5時には溢れたと、そういうシミュレーション結果になっているということでございます。

小川政人議員

だから、そういうシミュレーションができるということは、シミュレーションが正しいとすると、樋門はネック点よりも水を流さないということになりますよね。

塚田上下水道事業管理者

一つ違うのはですね、十四川はご存知のように感潮河川と言います。潮の高さによって水の流れが、関係してくると、そういう河川でございます。ですから今の議員の発言で言いますと、要は潮の水、海の水ですね、海の水の海水の高さ、それは全然触れられてないわけでございます。当時海水の高さがどうであったかというところも非常に肝要なことでございます。ですから、このシミュレーションはですね、その海面高さ、当時の海面高さも入れた条件でのシミュレーション、そして、やはり溢れるというシミュレーションの結果になっておるわけでございます。

小川政人議員

当時の海面、最高潮位が、満潮時が5時40分に、Y Pでいくと2.4mですね。もし、樋門が流れてきた水をみんな流す能力があれば、海の水、海水と水位は同じになるわけですが、それもあなた何度か認めてらっしゃると思うんです。すると、2.4mでは溢れませんか。最高2.4mにしかありませんから、潮位を考えても。

塚田上下水道事業管理者

水ですので、静水面の上ではですね、海面の高さと十四川の水面の高さは同じになると思います。これは皆さんもご存知だと思います。ところがですね、十四川の一番最下流というのはボックス構造になってます。それでそのボックスのところでは樋門が閉まるという形になってますね。ボックスのすぐ外は海です。海の高さです。

上流から川の水が押してくると、どうしてもそのボックスにすべて入りきらずに盛り上がります、水が。十四川のところでは、ボックスの上流側では。ですから海水面が2.4mであったとしたって、水は次々後ろから押してくるので、ボックスのすぐ上流ですか、そこは水が盛り上がるという形になります。

小川政人議員

ということはボックスの断面は、流れてくる水を流すだけの断面がないということになります、よろしい。

塚田上下水道事業管理者

海水の高さがですね、海の水位がボックスよりも低ければ流れるんですよ。だけど海水の高さが、海の水の抵抗があるので、だから盛り上がるということです。

小川政人議員

意味がよう分からんけども、断面的に多分21トンか22トン流すだけの断面がありますから、当然上流から流れてくる水は越水すれすれでも15、16トンくらいですから、ぶち当たることはなく流れていきますね、そういう計算を、中部大学でしたっけ、ネック点すれすれの水を流しても、水害当日の同じ潮位で水は流れていきますという調査結果ですね。

伊藤都市整備部長

中部大学工学部のところに昨年度、検証をお願いしましたけれど、あくまでもこれは河川計画でございますので、10年確率という前提で検証していただきました。ただネック点を通過する水は、そのまま海まで流れていくというところでございます。

以上は平成23年11月定例月議会の私の一般質問での議論ですが、それについて質問致します。

【質問】

十四川の一番最下流というのはボックス構造になっていますが、そのボックスの開口部の高さはY P 2.3mになっています。そうすると、塚田上下水道事業管理者の

説で行くと海水の高さがY P 2.3m以上になると、海の水の抵抗があるので、ネック点を通る水量でもボックスのすぐ上流で盛りあがって溢れることになり、潮位がY P 2.3m以上になるとボックスがネック点となるこの考え方は正しいのですか、上流のネック点の断面よりボックスの断面の方が広いのにサイホンの原理が働かないのですか、お尋ねいたします。

【答弁 10-1】

一般論として、ボックスの天端上に水面が上がった場合には抵抗により上流で盛り上がることはあると考えます。また上下流の水面高さの差によりサイホンの原理は働くものと考えます。

この考え方が正しいのであればボックスの開口部の高さを川の堤防の高さに合わせる必要があるのと違いますが、調整池の事業より先にボックスの改修をする必要があったのと違いますが、お尋ねいたします。

【答弁 10-2】

十四川調整池事業の検証を行った十四川河川整備計画検討業務報告書において、高潮対策樋門とポンプ場については、河川計画規模の洪水流下に支障はないと、報告を受けており、問題はないと考えています。

また、JRから下流の改修済みのところは朔望(平均)満潮位Y P 2.3m (T P 1.1 m)で計画高水流量 $19\text{m}^3/\text{秒}$ で海まで流れるという河川計画ですが間違いだったのですか、お尋ねいたします。

【答弁10-3】

お尋ねの河川計画の内容については間違いではありません。

また、アオイテックの流量調査における不等流計算に基づく河川の流下能力計算では、ネック点での最大流量 $16.143\text{m}^3/\text{秒}$ は、朔望(平均)満潮位Y P 2.3m (T P 1.1 m)でも溢れずに海(ボックスの外)まで流れるという計算と違いますが、お尋ねいたします。

【答弁10-4】

アオイテックの流量調査は最下流をボックス地点とし、そこに TP1.11m の水位を与え、ネック点で堤防を越水しない流量を計算しているものと理解しています。

また、中部大学工学部の検証でも東海豪雨当日の最高潮位 Y P 2.4m でもネック点で通過する水は溢れずに流れていくという結論が導かれているのと違いますか、お尋ねいたします。

【答弁10-5】

検証では、東海豪雨時の潮位波形を用いて、東海豪雨当日の降雨ではなく、10年確率の降雨による計画高水流量は安全に流下できる、となっています。

塚田上下水道事業管理者は自分たちの作成してきた河川計画が間違えていると言っているのですが、これこそ裏切りではないですか、いかがお考えですか、お尋ねいたします。

【答弁10-6】

上下水道事業管理者は、河川計画が間違えているという答弁はしておりません。

蛇足ですが、塚田上下水道事業管理者の嘘につきあって海の水の抵抗でネック点を通ってきた水がボックスにすべて入りきらずに、ボックスのすぐ上流で盛り上がり、当時の海面高さ（最高 Y P 2.4m）も入れた条件でのシミュレーションではやはり午後5時ごろ溢れるというシミュレーションの結果になったとしても、ボックスに入りきらなかった水は、ポンプを運転すれば海に流すことができるので午後5時ごろ溢れなくて済むのではないですか、お尋ねいたします。

【答弁10-7】

検証しておりませんのでお答えできません。

小川政人議員

あのね、旧堤防より30cmかさ上げと、これは中部大学の報告書にも書いてありますよね。それで私はそれを、30cm上げたんだから、31cmになっているということで、1cmですよ。1cm、2cmは波打つのはそんな差がないで。あなたが言うようにね。そんな大きな、ここで問題になるわけではない。5cm、10cmの波打ち方で水は流れていくとすると、そう大した問題、そこで漏れなかった水というのはですね、東海豪雨当日も四高付近で漏れなかったということを認めているんですから、当然同じような水が流れていったということですよ。だから溢れなかったということ。それからあなたは何度も断面の狭いところから断面の広いところでは、流れていきますよと言っているんですよ。違いますか。

塚田上下水道事業管理者

同じ雨の量ならですね、そのネック点を通った水はそのまま下流へ流れていくということになります。ですから今の議員のお話は降雨強度が72.8ミリのときのお話でございます。仮に120ミリの雨が降ったとすれば、ネック点を通過する水の量というのは、72.8ミリの雨と120.5ミリの雨と比較すると違います。当然120ミリの雨が降ると、後ろからようけ押してくるわけです。ですから水の流れというのは早くなります。押してくるからね。すると同じ断面のところを通過する水の量も変わってまいります。ですから、常に一定ということはありません。

以上も平成23年11月定例月議会の私の一般質問での議論ですが、それについて質問致します。

【質問】

前述したように東海豪雨時はネック点で溢水していないことから十四川流域では10年確率の時間当たり72.8mm以下の降雨であったことが実証されており、72.8ミリの雨と120.5ミリの雨と比較する必要はないと思いたしますがいかがですかお尋ねいたします。

【答弁11-1】

実際の雨の量は観測されておらずわかりません。

また、降雨強度が変わり水の流れが変わったとしても川全体の水の流れが比例して変わるのであり、断面の狭い所で流れる水量は断面の広い所では流れていくのと違いますか、お尋ねいたします。

【答弁11-2】

水の流れる量が同じで、勾配が同じとすれば、一般的にはそういえます。

塚田上下水道事業管理者

何にも私、120ミリにこだわっているわけじゃありませんが、だから大矢知のところは何ミリの雨が降ったかというのは測定値がないから分らんわけです。それで唯一分かるのは、当時の十四川のネック点では溢れたということ、関係はないとすればね、すれば、いっぱい流れたという可能性もあるわけですね。こぼれずにいっぱい流れた。もう一つは、調整池を作るときの河川の計算では、洪水の水位高

というのを、流れる水の水位高というのは、堤防天端いっぱいにとってなくて、余裕高をとってます。余裕高をとって、そのときに72.8ミリの雨が降ったときに十分流れるだけの池を造ったということですね。ですからそのときに余裕高も含めて、堤防の天端までいっぱい水が流れたとすれば、そのときにどんだけの水が流れたかっていうのは、把握は出来てないということです。

以上は平成23年11月定例月議会での私の一般質問に対する塚田上下水道事業管理者の答弁ですが、それについて質問致します。

【質問】

平成23年11月25日付の文書質問答弁書で都市整備部は次のように回答されました。「アオイテックの流量調査における不等流計算に基づく河川の流下能力計算では、ネック点での最大流量16.143m³/秒に対し、JRから下流側の十四川は25m³/秒の流下能力があるとされており、樋門が開いていれば流下できると考えますが、これは10年確率の降雨を想定した検討であり、東海豪雨を想定したものではありません。」間違いありませんね。確認いたします。

【答弁12-1】

この回答は平成23年8月12日付け第6号に対する回答です。

内容としては、文章中「これは10年確率の降雨を想定した検討であり」とありますが、詳しくはアオイテックが作成した甲24号証は、市が平成14年度にアオイテックに委託して作成した10年確率の降雨を想定した検討をもとに十四川堤防から越水しない最大流量の把握を目的として作成されたものと思われませんが、東海豪雨当日を想定したものではないと思われま

「72.8ミリの雨が降ったときに余裕高も含めて、堤防の天端までいっぱい水が流れたとすれば、そのときにどんだけの水が流れたかっていうのは、把握は出来てないということです。」10年確率の降雨というのは72.8ミリの雨のことですね、塚田上下水道事業管理答弁は嘘ですね、お尋ねいたします。

【答弁12-2】

この答弁の趣旨は、「東海豪雨時に天端いっぱい流れる水の量は把握しておりません。」ということです。